

大学史資料室通信

農大

第5号
2014. 6. 1



東京農業大学展示スペース「実学の杜」

開放系の「農」ネットワーク図書館を目指して

第二〇代館長 矢口行雄



本年一月に農大アカデミアセンターが完成、図書館は四月七日にグラランドオープンいたしました。新図書館は、農大アカデミアセンターの三階から七階までを占め、地下二階には自動図書館倉庫を備えています。座席数は九六四席、蔵書数は図書約五五万冊、雑誌約二六〇〇種類を保有しています。さらに一階には展示スペース「実学の杜」を開室いたしました。

本学の図書館は、初代学長横井時敬により、大正一一年一月一〇日の大学令による大学昇格を契機に図書館設立事務所を開設したのがそもその端緒でした。当時は、横井学長の八八二冊をはじめ、多くの図書寄贈があったといえます。また、第二次世界大戦に大学全焼という大火の中、当時の大野館長をはじめ、職員が書庫の扉に土を塗って中の資料を守り抜いた、という経緯が伝わっています。当時このような専門書は高額で一度に収集することは困難でしたが、その中でも農学的な見地から将来の農学に寄与することに値する書籍を厳選・収集したところに、大野館長の図書館員としての見識と農大の発展を望む姿が垣間見えます。現在はセレクトされた数点の貴重書に限られますが、電子化された貴重書を閲覧できると共に、図書館員の魂を感じただければと思います。

その後、昭和二〇年五月、戦火により渋谷・常盤松の書庫倉庫以外すべてを消失した図書館は、昭和二四年五月、元陸軍機甲整備学校技術研究所跡（現、東京農業大学第一高等学校構内）に移転しました。そして、皆様方の記憶にある四階建ての旧図書館は、昭和四三年三月に現在の地に開設されました。あれから四六年、まさに近代的な新図書館は三階および六階の連絡通路で一号館の教室と繋がり、また経堂門からはエスカレーターで三階の入口まで導いてくれます。農大生のための歴史ある開放系の「農」ネットワーク図書館が完成いたしました。

大学史資料室所蔵史料の紹介(四)

榎本武揚の「流星刀」と横井時敬のフロックコート

―ト

本年四月七日、新図書館の開館と時を同じくして、農大アカデミアセンター一階に展示スペース「実学の杜」が開室した。「実学の杜」は、入り口の「建学のころ」、入って左側面の「二人の学祖」、正面壁面の「農大のあゆみ」、右側壁面の「農大の取り組み、農大のマンパワー」、および部屋中央部の「リラクゼーションスペース」の五区画から構成されている。「二人の学祖」では、東京農業大学の生みの親・榎本武揚と育ての親・横井時敬に関する展示を行っているが、紙の資料類が多いなかで、展示品として目をひくのが、榎本武揚の「流星刀」と横井時敬のフロックコートである。

「流星刀」は、榎本武揚が隕鉄を原料に、刀工に鍛造させた日本刀である。武揚が科学技術全般に造詣が深かったことは良く知られているが、武揚の曾孫に当たられる榎本隆充氏によれば、ロシア全権公使としてのペテルブルク滞在中(一八七四〜一八七八年)、「アレクサンダー一世所蔵の星鉄刀をツアルスコエ・セロー離宮で初めて見て、興味を持った」という。やがて、帰国、農商務大臣時代の一八九五年、富山県白萩村で発見された隕石が、農商務省地質調査所で隕鉄と鑑定されたのを知って、それを購入、隕鉄から日本刀を作る研究にいそしんだ。研究成果は一八九八年に「流星刀記事」としてまとめられ、一九〇二年一月、今日まで続く権威ある東京地学協会(武揚は副会長を務めた)の機関誌『地学雑誌』にその抜萃が発表された。内容は、「本邦ニ於テ発見セシ星鉄ノ

記事」、農商務省鉱山局地質課高山甚太郎による「分析成績報告書」、「流星刀奉献ノ発念並ニ古来星鉄ヲ以テ刀ヲ造リタル古例」、「献上ノ流星刀刀身ニ関スル特質」などである。

さて、一八九八年、武揚が刀工岡吉国宗に、白萩隕鉄一貫余り(約四キロ)から作らせた「流星刀」は、長刀が二振、短刀が三振であった。うち、長刀一振は当時の皇太子(のちの大正天皇)に献上された。短刀三振のうちの二振は、榎本隆充氏が所蔵されている。

残りの長刀一振と短刀一振は、長く行方不明とされていた(例えば富山市科学博物館HP)が、本学所蔵の「流星刀」は行方不明とされていたこの長刀である。ちなみに、「流星刀」を作った残りの隕鉄は、一九〇九年に武揚の長男武憲氏より国立科学博物館に寄贈された。

本学所蔵の「流星刀」(長刀)は、二〇一一年末、榎本武揚の次男、春之助氏の令孫に当たられる籠宮順子・良彦様にご兄弟より、二人のご尊母である籠宮道子様の遺志ということで本学に寄贈のお申し出があり、翌二〇一二年三月に、他の三振の日本刀とともに引き渡しを受けたものである。お二人に心よりお礼を申し上げます。

ご寄贈いただいた「流星刀」は、長さ六八・六センチメートル、反り一・五センチメートルで、銘が表に「東京住岡吉国宗作明治三十一年四月八日」、裏に「以星鉄造之」と記されている。なお、他の三振の日本刀のうち、一振は長刀で銘が表に「備前国住長船祐定作」、裏に「大永七年八月吉日」とある。残りの二振はいずれも短刀で、一振は表に「備州長船兼光」、裏に「永享元年二月日」とあり、一振は「吉光」とのみある。

「流星刀」は、優れた科学者としての榎本武揚の面目を如実に伝えるもので、農学の殿堂である本学の至宝となるであろう。また、他の日本刀も、いずれも本学の生みの親・榎本武揚ゆかりの品であり、本学の宝として長く後世に伝えていきたい。

さて、もう一つの横井時敬のフロックコートである。



流星刀(複製)*



横井時敬着用のフロックコート（複製）＊

このフロックコートは、盛岡高等農林学校（岩手大学農学部）の前身、横井は同校の講師を勤めた）から贈られた鉄瓶と合わせて、二〇一三年八月に、時敬の令孫に当たられる横井時燁氏より寄贈を受けたものである。このフロックコートがいつ頃作られ、どんな時に着用されたかなどは一切不明である。とは言え、本学大学史資料室では、各種辞令等、横井時敬に関する紙の資料は比較的多く保存しているが、紙以外の資料としては、「勲一等瑞宝章」や時敬が書の揮毫に愛用した落款、そして時敬の葬儀の際に鉞毒被害民より贈られた弔旗くらいしか現物資料がないため、写真でしか見ることでできない横井時敬の姿を偲ぶ貴重な資料であることは間違いない。一九二五年一〇月、東京農業大学の大学昇格祝賀会の際に、時敬がフロックコートを着て学旗とともに行進している写真（『横井時敬の遺産』七六頁）があるが、これが「実学の杜」のフロックコートではないかなどと想像してみるのも楽しい。（第十九代図書館長 友田清彦記）

横井講堂と旧横井講堂

農大アカデミアセンターの地下一階は、横井講堂である。横井講堂の「横井」が、初代学長横井時敬にちなむものであることは贅言を要しない。しかし、この横井講堂が東京農業大学にとって二代目の横井講堂であることを知る人は、意外に少ないかも知れない。初代の横井講堂は、正式には横井博士記念講堂といひ、一九三一年二月、渋谷・常盤松の構内に竣工した。遡ること四年、一九二七年十一月の横井時敬逝去後、知友や門下生の間に、「故博士を永遠に最も有意義に記念する方法を講ずるの議、怫然として起り、有志会合の上、横井博士記念事業を企て東京農業大学構内に記念講堂を建設」することになったのである。事業の委員長には、駒場農学校時代の横井の同級生で、当時財団法人東京農業大学評議員会議長であった恒藤規隆が任せられ、早速募金活動が開始された。かくて、七万七五九一円余の募金が集ま



旧横井講堂（昭和6年撮影）＊

り、工事を清水組に請け負わせた。一九三一年二月竣工、翌三月に開館式を挙行した。合わせて横井時敬の胸像建設も企画され、本山白雲の手になる胸像が横井講堂の前に完成、一九三二年十一月に除幕式が行われた。この胸像は戦時中に供出させられたが、戦後、校友等の熱意により一九五八年に再建、現在に至っている。横井講堂も、形は変えながらも、ようやく再建され、創立一二五周年を間近に控え、横井講堂と横井胸像がそろって再現されることになったのである。（第十九代図書館長 友田清彦記）

東京農業大学の人々(三) — 恒藤規隆 —

ここに『朝日新聞』二〇一四年一月九日夕刊の「うぶあがり」をたどって」という記事がある。沖大東島に關する記事である。沖大東島は「通称ラサ島。ラサはラテン語で『平ら』を意味する。一八〇七年にフランスの軍艦が命名した。一九〇〇(明治三三)年、日本の領土になり、沖大東島の名を与えられた。／周囲四・五キロの島は、東京に本社のある化成品メーカー『ラサ工業』が所有し、国に貸している。『現在は米軍の射爆場になっているが、かつては国内では数少ないリン鉱石の採掘場であった。そして、ラサ工業の前身であるラサ島燐磁合資会社の創業者こそ、前述の横井講堂建設の際に事業の委員長をつとめた恒藤規隆であった。

恒藤規隆は、一八五七年、豊前中津町に恒藤半四郎の次男として生まれた。一八七五年、大阪英語学校創設とともに同校に入学、卒業後の一八七八年、駒場農学校農学科に二期生として入学した。横井



時敬の同級である。一八八〇年六月、同校卒業後

は、農商務省地質調査所御用掛、同省地質局技手、農商務技師試補、技師などとして、お雇いドイツ人農学者マックス・フェスカの下で、一貫して土性調査事業に従事した。ちなみに、フェスカは福岡時代の横井時敬の業績に着目し、横井を農商務省に推薦した人物で、近代日本農学の誕生に大きな影響を与えた。恒藤は、フェスカ帰国後も土性課長として、土性調査事業を指導、一八九九年には横井時敬らとともにわが国初の農学博士となった。翌一九〇〇年、肥料磁物調査所が設立されると同所長となり、一九〇三年行政整理のため同所が廃止されたのを機に官を辞した。退官後は肥料磁物、とくにリン鉱石の開発事業に従事、一九一一年ラサ島燐磁合資会社を創業し、肥料原料であるリン鉱石の自給に心血を注いだ。一九三八年一月六日、逝去。享年八二歳であった。逝去に際して、勲四等瑞宝章が授与された。

主著には、『日本土壤論』(一九〇四)、『日本地産統計』(一九〇六)、『南日本の富源』(一九一〇)等々がある。

本学との関係では、一九二五年六月、東京農業大学評議員会議長に就任、一九三四年には大日本農学会副会頭に就任している。ちなみに、本学で三五年にわたって肥料学を講じ、法人評議員・理事も務め、さらに農友会相撲部長として豊山(のちの時津風親方)などを育てた南禮蔵博士が、リン鉱石の虜となったのは、一九二九・三〇年と恒藤の供をして、沖繩のリン鉱石調査を行ったのが契機であった。

(第十九代図書館長 友田清彦記)

編集後記

図書館が生まれ変わりました。本号記事にもある通り、横井講堂が復活いたしました。二号に渡り取り上げました、展示スペース「実学の杜」の新設。同時に、「図書館」という名称も復活し新しい歴史を刻み始めました。

これを機に大学史料室も、個別に管理していた大学史料、貴重書、明治・大正期の卒業論文を統合し収集保存する、大学史料室として出発いたしました。合わせて本誌も『大学史料室通信』と改題いたしました。

新棟建設、旧棟から仮設、仮設から新棟へと二回の引越し、仮設図書館での運用、「実学の杜」の新設と、館長業務以外に「ご尽力くださいました第十九代図書館長 友田先生、二期四年に渡り、ありがとうございました。ございました。

第二〇代図書館長 矢口行雄先生を迎えました新しい図書館と大学史料室をよろしく願ひ申し上げます。

*本文中で*印の付いている資料は当大学史料室の所蔵資料です。

当資料室では東京農業大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農業大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、左記まで一報くだされば幸いです。

東京農業大学

図書館 大学史料室

T 156-8502

東京都世田谷区桜丘1-1-1

電話 03-5477-2526

FAX 03-5477-2546